

主 題：神とこの世のどちらを愛しますか  
 聖書箇所：マルコの福音書 14章1－11節

神の命令の中で最も大切な命令は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性をつくし、力を尽くして神を愛すること」だと教えられました。今日の箇所から、「神を愛することの大切さと世を愛することの愚かさ」を学んでゆきましょう。

14：1～これは水曜日のできごとです。過越しの祭りと種なしパンの祝いが過越しの祭りとされますが、それは7日間続きます。これはイスラエル人のエジプトでの奴隷としての苦しみと神によるそこからの解放を覚えるためです。祭司長、律法学者たちは神を愛することより宗教の儀式を重んじました。彼らはイエスを殺すことを決めていました。ヨハネ 11：47「祭司長とパリサイ人たちは議会を招集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くをしるしを行なっているというのに。」53節「そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。」、彼らはもうイエスを殺すことを決めてしまっていたのです。そして、2節を見ると、それは民衆の騒ぎを恐れて、祭りが終わってからにしようと話していたとあります。ヨセフスというユダヤの歴史家の記録によると、この祭りの間には25万6500頭の羊がほふられた、とあります。1頭の羊を10～20人で食するのです。この時、エルサレムには約300万の人々が滞在しました。地中海に面した町カイザリヤに駐在していてローマ兵たちはエルサレムに移動し、アントニア要塞に詰めていたのです。とにかく、非常に多くの人たちで満ち溢れていたことがわかります。この人たちの多くはイエスの話を聞き、そのしるしを直接見ていたのです。そして、祭司長や律法学者たちは旧約聖書に精通していました。けれども、彼らはその心を開かなかったのです。儀式を重んじるばかりでした。

ここで、マルコは神を愛したひとりの人、マリヤのことを記しています。彼女はベタニヤに住み、マルタとラザロの妹です。このマリヤがイエスに心からの愛を示すのです。ナルド油は非常に貴重で、香水として重宝されていました。この当時、イスラエルでも外国から多くの香料を輸入していました。ナルド油はインドから輸入していました。それをマリヤはイエスの頭に注いだとあります。ヨハネ 12：1にはこの時、「そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた」とあります。マリヤのこの行為はイエスに対する感謝と愛の現われです。同じヨハネ 12：3にはマリヤはそのナルドの香油を取って、イエスの足に塗って、髪の毛でぬぐった、とあります。女性の長い髪の毛は光栄の冠だといわれています(1コリント 11：15)。これはマリヤの謙虚さを示します。人の目を意識しないで、心にある思いをこのような行為で現わしたのです。家は香油のかおりでいっぱいになりました。そして、2節にはマルタのことが書かれています。マルタは給仕をしていました。イエスへの最高のもてなしをしたのでしょう。これもイエスへの愛の現われです。この当時、男性中心の世にあって、このように謙虚なすばらしい女性がいたのです。そして、2000年後の今、このマリヤの行為は人々に覚えられて、私たちはほめ称えるのです。大切なことは心の動機なのです。

一方、マルコ 14：4,5を見ると、何人かの者が憤慨しマリヤをきびしく責めた、とあります。責めつづけたのです。ヨハネ 12：4を見ると、イスカリオテ・ユダが言ったとあります。彼は弟子たちの中では会計の係りで金入れを預かっていたのですが、その中のものをいつも盗んでいたのです。ユダについては、使徒の働き 1：18で「不正なことをして得た報酬で…」と書かれています。

マルコ 14：6～8で、イエスはマリヤの行為を誉められています。りっぱなこととは美しい、良いという意味です。そして、その行為のタイミングを誉められました。記念になると、…(9節)。ここから私たちが学ぶことはイエスのために行うことは必ず喜ばれるということです。祝福があるのです。私たちはそのチャンスを逃さないようにしなければなりません。この出来事はヨハネ 12：1によると過越しの祭りの6日前にあったことです。エルサレムに入城する前です。マルコは祭司長、律法学者の行為、そして、ユダの行いと比較するために、このマリヤのことをあえてここに記したのです。

ユダに関して見ましょう。ユダはお金を愛し、自分自身を愛しました。みことばをいくつか見てゆきましょう。マルコ 14：10,11「…イスカリオテ・ユダは、…イエスを売ろうとして」、ヨハネ 13：27「彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼にはいった。」、ルカ 22：3「…イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンがはいった。」、この「はいった」というのは、ある考えに促すとか、ある行動に駆り立てるという意味です。また、ヨハネ 13：2には「…悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、

イエスを売ろうとする思いを入れていたが、」とあり、6:20には「…わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりには悪魔です。」とユダのことをこのように言われています。ユダはサタンの道具として、サタンが用いたのです。私たちもサタンの力の影響を受けます。ヨハネ 12:6に「彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。」とある通り、ユダは欲張りで、私腹を肥やしたのです。ユダはイエスをローマからの解放者として期待していたのです。自分の考えを優先し、イエスと寝食をともにしていたのに、イエスに対して一度も心を開かなかったのです。ユダは間違った選択によって、サタンに用いられる者となってしまいました。

私たちは選択の大切さを覚えることが大切です。皆さんはO・ヘンリーの「賢者の贈物」という物語をご存じでしょうか？これは、相手のことを愛するゆえに、自分の最も大切なものを犠牲にするというメッセージを私たちに伝えるのです。

マリヤの犠牲と勇気を学び、私たちも心から神を愛し、神のために自分のすべてを捧げてゆきたいものです。